甲第 529 号証

伊方トラブル 四電社長陳謝

県民の不信 最大値

知事ら「慢心なかったか」

「県民の不安感、不信感は最大値にある」「慢心がなかったか」。誤った制御棒引き抜き、電源の一時喪失など四国電力伊方原発（伊方町）での相次ぐトラブルを受け、長井啓介社長が中村時広知事や伊方町の高門清彦町長に謝罪に訪れた27日、住民の安全をあずかる両首長は厳しく四電の姿勢を問うた。長井社長は徹底的な原因究明や安全意識の向上などに取り組むとしたが、同社への信頼は大きく揺らいでいる。

伊方原発で相次ぐトラブルについて、高門清彦伊方町長（右）に陳謝する四国電力の長井啓介社長（中央）＝27日午後、伊方町役場

「これだけ立て続けに起きるのは、何かあると思わざるを得ない。緩みなのか。人事の問題か。関連業者の問題か。いろいろな要素を見極めて速やかに対処を」と中村知事は組織の危機管理意識に踏み込んだ。

（東京電力福島第1原発事故から）約9年がたったことを踏まえ、緊張感が四電関係者に（現在も）浸透し続けているのか心配との知事の苦言に、長井社長は「原因究明も個々の事象のみならず、背景などに目を向けて検討したい」と応じたものの、危機意識の欠如や技術継承の問題、労務負担の影響を問う記者からの質問には「真摯（しんし）に受け止める。予断なく調査する」との回答に終始した。

長井社長は、伊方原発で直接意見交換することによって現場の意識向上やモチベーション維持につなげたいとの思いを強調。中村知事との面会後、「まずできる対策」として原発構内で定検作業や工事などに携わる関連、協力会社計約30社に注意を喚起したいう。

27日の県議会の環境保健福祉委員会でも「すみませんじゃすまない」「県民は大きな不安を抱いている」と与野党の委員から意見が噴出。委員長の松尾和久氏（自民）は、委員会として検証結果の説明を求める考えを示している。

（森岡岳夢、伊藤愛、今西晋）

半径30キロ圏6市町首長 原因究明・再発防止を

伊方原発（伊方町）での相次ぐトラブルで、原発から半径30キロ圏内にある6市町の首長からは、早急な原因究明と徹底した再発防止を求める声が上がった。

八幡浜市の大城一郎市長は四国電力に対し「トラブルの原因や、点検でどのような（リスクの）想定をしていたのかを、きちんと説明してほしい。これだけトラブルが続けば市民も不安を覚える。安全安心な作業という最低限のことを守ってもらわないと」と訴えた。

西予市の管家一夫市長も「急にトラブルが頻発しだした原因を究明してほしい。厳正さを求められる施設だとあらためて自覚してほしい」と四電に注文を付けた。積極的な情報公開も重要との認識を示した。

大洲市の二宮隆久市長は「大変遺憾。四電は気を引き締めて、原因究明と再発防止に最優先で取り組んでいただきたい」とのコメントを出した。

宇和島市の岡原文彰市長は確実な再発防止策に言及した上で、電力供給に関して「住民の生活や企業活動に支障のないようにしっかりと対応していただきたい」とした。

伊予市の武智邦典市長と内子町の稲本隆寿町長も原因究明と再発防止を強調。「万全の対策を講じていただきたい」（武智市長）「改善に向けて全力の取り組みを」（稲本町長）とした。

四電社長 仮処分へ変わらず異議

四国電力の長井啓介社長の謝罪後の一問一答は次の通り。

―中村時広知事の要望をどう受け止めるか。

極めて重く受け止めている。本部長の常駐はもちろん、原因の究明と対策も真摯（トラブルの）背景も見極めての検討が必要と考える。特に意識の問題は重視したい。これまでは訓示で一方通行で伝えていたが、それでは十分ではない。発電所に出向き、思いを伝え、みなさんの思いを聞く。情報交換しながら意識の共有を図ることで、安全意識が高まり、モチベーションも維持向上できると思う。

―広島高裁の仮処分決定への異議申し立ては。

今はできる状態ではない。安全意識への取り組みなども踏まえて総合的に判断することになると思う。（具体的な期限は）設けない。決定に問題があるとの思いは変わらず、引き延ばすことは考えていない。

―安全意識を高める必要があるということだが、意識の低さがあったのか。

そうしたご心配がある現状を踏まえ、意識の向上、共有を図りたい。

―制御棒引き抜き時に手を打っておけば今回は防げたのではないか。

結果として対応が遅れたことはあると思う。